今川了俊和寄不審抄

伊地知文庫
文庫20
298

文庫20
298

伊地知氏書冊

今川了俊和歌所に不審條々
註和歌所の人々に申されし詠歌の事云々
とふかりめいいう成とすゝめられ先達の作をくゝ
ハ多紀とす用ゝ紀氏古集歌の事ゝ代集再三
六人ゝの家の集ハ家ゝ別ゝ詞と云々
東源と申ゝ云とゝ云へ云々
随分の言葉ゝ上代ゝ不撰詞
以前ゝ一流ゝ以前ゝ必可撰とゝ
撰ゝ中代ゝ一ゝ不撰と云ゝ且ゝ
詞ゝ云ゝ詞ゝ及ゝ詞ゝ
注ゝ皆一代ゝ達ゝ上ゝ不撰ゝ初ゝ

人のよろこぶ事をかきあつめて世に及ぼすこと
家柄の者のよめんをやうく多く詞をつくさん
の續をつくさんに人は則今詞とまをす古今の
云ふ所もつて也さら一文あの文集のうりやうより
下再よりもしは百首に及ぶ多く詞をつくさんに
しるかたきをやこれまくは未だ見ぬを自
うまれたる歌ゆや二条家の御子たれと自ら云
もしらも三代集ふとおされとかしらの詞を新
詞とをくへすらく御ふるまくはる自ふまや
されは山一帖よりも多くも皆千代のよろの作
なれと新しくよりて後はつくしき詞とは

可謂やひさうの古言をくりかへしてはいくへ
伝へき制の詞をこれはあつてもそうまくはる作
くあるをとうまれとも詞をとも少
あるくすはくるへきはとをひ作はいくへさ
但光貞の国さくあれへはおの一詞と續た
つあるれ天性はのやまきくとはこはきくとの
云はは思のうりあやゆりやまれをひとの骨より
へしと称やいうあをは思はの思りよりて下
思るや可合をの方は自化吹を雖ト(仮名)
称於つかなりへしたるは時はくとも詞を
ヒ度くくすあんしてこと千のくとあう

風情とうふへさとなるゆゑや何乃松浦のやらん
と作るうふとあ面り作りさふとよまれもるる面と
に女懐ふと毋詞よりまこゆるふや今詞と云よ
付る人さうれひるく幸作るや山沢く為人
あれたのくりへ毋とへ山たり花と云つすと山
ふうくと漬天人とあ月人と云へきと天津人と流
月と泳とて久世通と泳とく乱落又久〳〵と
面毋とるかりれとつ光又八毋詞と略〳〵也
短く漬短詞と長漬詞とひへきと流〳〵もと
漬あぬりと干漬とあるうりと漬ひめけの詞
教とるとへとけ号とと〳〵ふ詞と干ひやん

前よりひつるあまり行きふとふ詞もれとれて
きふ記かれたとれりへうきれ日記久人ゆ通る花
うと出れとふ年懐ゆとひやうけ等ヒトひの者あまり
き漬ゆ〳〵きまやもと漬くふ男も漬ぬ通るきくと
古寄まの八ひ八〳〵ふ通面ひれもつせうるのるさ
ひへ干毋詞うも年懐ゆもきまへひるや制の詞と一
つ八皆さあるぬ分月まもと漬くうもひへもつ者う
十面四人くれよ志くれ八ひ詞と月今後ちま
新久漬ゆれ志へ八ひ面〳〵ふ人きふ海岩
ひ八ゆ橋乃後生れあやうふ記ひうまるひ
又かうく面ゆれ乃とは死うもれるひ

是は白きうとも事にも、いましめふくはらなし
云ハ其時代よ自他好みを詠わされ候
志りく成らせ事候へと時代局くハ
今の体よりて今ハかく可詠候すや代々
守すと為蕪候の守すとかくうちよませ
語く候ハ若文なりむ迄て危しておほ詠
度時も○つ物候ハとよ志りと云詞もとつき
あくハいふしめ嫌れるあハよも候ハ嵐志
うし山の端志り雲井すこうきうくふ是奇
なも候うるあ思候へてた志きうくの浦
やとしおもえ候と永代詠せへうんとはき二

すらいふあくく候ハ今の時地下の是奇まと浦
和歌番露うと松の自他の事候而ハ云浦なと
久露あとくとヤよハそれをもとつ盛ふくとまへくや
候あ候叶顔おりくせえ候し和奇も是めりの松き
へ立飛詞をそく多く詞とも可嫌候やらん

一 珍しく見へ候古歌

堀河百首

かへるさの村えし駒のあしきかな
是ゆく草のあとうき志ら
志河のおもゝ苗代の跡とあせと跡く
今もうれ井戸捨らしきける

雨はやむ雲のはすゑにいづる月の
影のみぞなかれの水のすゑのうら

後鳥羽院

夏乃夜を枕をとほる蟬のこゑ乃
かはりてもねふれ秋のまくら

定家卿

夏山の草葉のかげにしのれども
去年の小松人しれぬうすき

衣笠内大臣

故火の河を堰ふむかふかぜの
都の人ありとせばうき卿

俊頼朝臣

かやり火の煙りむせぶこゝろされ
とひむつかしきこゝろなき卿

俊成卿

夕立乃雲まよりても数遣火の
しめりもえぬるかやり卿

好忠

夏の日の黄の深ゆうともせをり
衣ぬきかけかへし絶ぬ衣

小大君

うつし帰ぬとも志ろて夏河衣

ひとへにすゝきのハすゝきにしてなり
　　惠子法師
あるゝ孫まつ夜六月の景ハ秋ふかき
ゆふさるの風ぬるくもあるる
　　後成卿
庵の面ハ苔深のとなりかな柳
ちとゝ秋ぬ志ぬ夜ハ二月哉
　　信奉
大原や田中の水ハ秋ぬ志ぬ
秋ぬ志ぬ月ハ
　　後成卿

山賤の垣ぬ秋ぬ志ぬ
夕ぬ志ぬ秋ぬ
　　西行
ぬ志ぬ聖面
すゝくゝ
　　西行
面のまゝ
ぬ志ぬ
　　泉蓮
葉ぬ
ぬ志ぬ
夕ぬ志ぬ
いとゝ

極楽のあゐ乃打敷のうちなくハ
なふくあらましのむきもあまし

経信

池ありひ川松乃みえあり葉志
波とかくる夜さ花ありけり

物名寺

花乃色ありあらハ水めてあきらめさせ
いまくらかさ折てかすら葉し

忠峯

かのあく井をたし山田みまきし惜しハ
られ菖蒲とも立ありけり

玉こすくハらうらねき乃く機のかり
うきわのこゑにつみねゆうかなり

西行

あきてかなし昔河らそらさを役みく
ゆきられくまし夕々ほの花

俊成卿

なとといとく蓮の立葉にゆらく露ふくとも
この世の池ゆく花ちらすなり

影季

夕まれきを池の蓮かなひさく葉ふふ
露吹とゝくて風ありすくしまり

俊成卿

玉水と運のうき草ふかき冬こゝろ
こゝろや冬のひとりなるらん

西行

夕立のしたるやとりあまの
雨やわすれぬる蓮のうへの露

同

しなてるすゝの池の蓮の葉
ひらけすゝしき秋の風

同

水ぬるまの菱のうきうの葉ふ
みゝ分くゝ立の池ひてもの

同

山里の平面の蓮はさきの花あり
ちりのこりの秋せゝの乃ゝ

乗蓮

世間をもの山ちのハ夫ゝ
風ふきあの海せゝの乃ゝ

定家

住乃元の杉の、これ波風
こゝのはちるの、ゝ乃ゝ打ちふ

仲正

夏山の雅乃茂ふかに花つきく
耳の月もなくゆきの蟬ぶ

俊惠

夏山乃こひしくまく鳴蟬を
木ぬもとゆきの野ちらす氣

慈鎮

夏りあふ吉野ふの下濱を
あけさらぬ せこそ乃夢てゆりく

吉さ野ふとは多枕の夏し
又ふさきの行うる夏枕乃多

同

職乃おの文ひ和の門をこ
ふの方ふ山ふ内とひ山ゆり

同

あけさらぬ花の嵐ふ大さ山ふ
秋とうふる正きの江の紫

西行

波ふる河原柳の吉みとり
涼しくわふる岸の夕ゝ乃

宗祇

夏の乃ふ八月ふ乃ふ乃風ふ
ふ屋の軒ふ乃ふ乃のふ乃

後頼

田さらわハあるそひゆうゑ新さは
吉野のちるハふる風吉りきわ

同

あるゆハ文時てう新歌 立ゆ乃
うわちゝへとゝもおひしせひつ

仲正

ちゝひあけぬ葉のたにうくせとも
金の鐵乃花ちゝうく 出雲

堀河百首

仲正

神ちひのきゝあ里ちわつ

同

ちゝ紀はしゝ田の代ハ的ゝ花
いゝ紀ちうへよしろうちゝやゝ

河内

とけ孫とゝ市ふふるあうとよ
ちゝ氷宮ちうそわハ宮出歌

國信

萩乃葉のとハすうゝ七そよめ紀ち
そゝうち同ゝとゝ海一つ新

西行

[illegible]

いつすてもかなしきかな

仲正

明かの〻時のはかりはかなき

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後拾

おもふ人はかりをあかしの

あらまのとをとをしかりけり

同

[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

[illegible]

けのうくすりなる是ぞ[illegible]

基俊

寒く海の新[illegible]ゆくそれは
とのまろうふるをのこさふ人

後頼

思へども家ふこそあらろえて
見まほしかはなは人をわとへて

志めゆふ夜ゆへ秋風ふきて
[illegible]

橘仲遠

さくらハ神[illegible]やまとの孫河原

[illegible]

神ふのとうぬ乃[illegible]

一 前[illegible]ぬへき事四部[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

志賀ふと
角ゝと云と
うらまわしうと
雪のふると
知らくと云と
うつむきてと
魚すきと
ぬるゝと
人ぬ角さと
ふるもとりと
あらうと

いまゝと
角ゝと云と
花さゝゝと續
君の方ゝと
知らくと云と
うつむきてと
魚ハ中見ると
それうつゝと
後へさと
ふるもとり
くらうと

行くと
人のきくと
人の間を友と
行くさと
きのふと
うつゝと
去けうと
ものやとあと

かくと
人のきくみと云
人とすきぬと
やゝこと
きそと
うつゝと
去けと
ものすきふと云

すつゝ如斯の云歌と言ふ物とけふと言ふ物
ゝへさまやまのもうて世ゝ河と云へさくの更下

見さまへくるゝ趣なし今案と称すへからす也
此のあかりは乞丁律し両々の法相当あつてへき
きらめかすへし

一 銀阿か守随と見ん也へて十首より七八首も古事を
多くは用ようそし也可於旅の事ある也にも新旧讀
らん洞とは多く云と下也にらん是れも西行之
後秋知長亭との詠歌と見ん也へてこうしめてよ
ませられうとたかしき守洞のこひたしまうへは此人
くの守の様とはまうなきしく也か定家の作は
後秋ともかれて守あるへうしもとも作 又中古の和
守の歌あしくおもなく也と西行上人と云人好みて

此道と異なるかれたれかせうかれくも也へは此風体とたてる
へきとは其へきを思也り不治まて代あくも也へて
人の生涯の内にかしかまうく詠也くうく守を好
也やらん平ちとも治世を用也くうて此一体すては
ゑるまし也とも也始也かんり八十体とて不く也と首より
ま也好む新九の御を一句いまも此也かへきあく
ちしむへきやかんやうしく其也為世為意也の法
風体の思白のかりめ見へ也れあ下不抵て二様り
承及也是よりうそひすへて一とるみまり
入らんひも作るとちか夜花の法行ひ也

らせ給ふと一祈なりとはかなくよろこび給
ひしかは昔も今も神の風祈り申さるゝ所
稜威まします石清水八幡宮の寺
はるゝ人の祈り給ふ所なれは
つゝしみやさしき御心稜威
御心のうちは文武にすぐれ
まさるのみならず内つ神
なる御神詠なれはとはかりなし
しかるに御ハ人皇ならぬ神
と源氏すなわち御一人也
皇ハ人皇なり

一　三十六人の歌仙と上代ふる同祈ふしあるべ
しとおもひはかりてみるに中古以来後後頼
朝河内百首の人数なれとも後又後京極殿
後成卿西行上人定家兼蓮等ハ孫文孫
なれ共一興のうちに代りて
と不叶迄なれ共事百首
六歌の内のうち二十歌
きしかさうてハあるまじ
御ひやうしのうちに
御へくらのうち
とくさのうちの

候ハヽ必定耳に入候はゞ放蕩（ほうとう）の名にく
作りなるとの此か口取を出すけると嫉しや
是も一朶なれとも結構に候しか共世の為の事
是度も申入候しかとも此次に一ツ申ふて候
好忠か奇妙と無度主と候れ共何ニ停候しも
孫女衆の於かしくみえ候まゝ放蕩敷の内奇妙と御
子たちの人々申候何の孫女郎しく存すれは候
へともいけ申さぬ内奇なく候まてためしや左方
奇之郎などもいづ家内には申候事候へ長ちかき新
と一緒にくゝ候へ入るに事かなく六ツ此所源寄の中
まて其ぬるもいりく伏図結ても いろく御済候了人

申ても都付申てさ此者家の内奇様とさく
申候事の業ハ猶にくゝ取ありて家業の不堪の者
多て候氏同着仕候人に与え申と候とさく候
存候能生への文運し徳有にハ此御用有り然
しかはよろし彼高の子孫女子等と申若候氏哉
よ候て種をしるしハ申候てと残したく存御
子たち方此事ハ安神の御加護にも遂候て
源さへ候は遂て能とあしくとても申人候て
只立服なく一世川とも結ぶる業のせめく此
なすに申し候と此具に存候

一
小野乃清業の奇合に勝負定候に無度源

今と願よりは別に宮祢あるは別そ為
社法示り入いりと為るは是て示と
此の方も勝の如て付て是そ方ハしく
又願の方ハ一端歌ハてん座ら作ふと頂
納付ふそ也とあるは不審の事
なれとんよりるふ毎三義仕ふ同節
入度ふいうあるへく系

一 御当道の事今ハ一天下の時続ふく諸人ハ
上ふ吏て出草あるちしくふ別ハ為かめと不良
く成敗乃出時と脇て入ハ為ふく内ハ世も
遠ふふ又ハ今日ふいうあるを詰て事とふ重

よ内渡ふく内節ふ為て他乃ふ拍とり
ふは内門弟ふ一同て歌ハふ為ふ為ふも歌敬ふく
作ふく道とふやう毛仕ふへうと上て
ふは歌ふ道ハ表神乃仕ふらひて上ふ
とふとふく方仮ふへうまて作ふ〜今ふう
思合ふふ仕ハ為ふ歌ふと人ふん日て思ハ為ふ
為ともふやう毛結ふて可同ふ為世ふ紙ふの
不ふ〜見ハふ時ハ為ふ為ふき内子孫ふよ方の経冊と
疏勅と云ふ毛ハふ為ふく方勅の表道内為ふ
ふふと人て云毛ハふれふ又内裏て節会の
夜衣ふ引ふと為ふけふ為ふ内ふと出毛為為ふ

つき女をうしなひてあくる年やよひてとひけれは
こゝろをよみ給ふ
たちかへる人の名のみか磯の
なみのみもはか荒の波の卯の花
とよませ給ふなりけるとやまたはそのきはの
年の暮の節会に此内侍かく勾当内侍の衣
になりしをたかくせられけり使さりしと仰
られけれは此女房見返してあの名やま
てとりけりを袖をひろけて
されこそ歌かとふちこそれかりこそれ
ふかきもとめもおもしろけり

とりつくろはれけりとやさしくきこえしよりは
なりしをまた世々の歌女に伝へられけるにて
荒の波乃句をはよませ給ふなりとせるまゝと
かはし者からはしや花も秋の道をいふと
よそ給ひけりかくやさしくそよはれけるめてたくも
あはれなる定家卿は此後古今集を懐中にて
給ふ事かく文字読みかはし此続きの歌とも
ふ給くはなし仰はしとはあまりなる次第
人も中歌をもよみしかと新勅撰の風はふかく
道をも得たるはなきかなや右のかきに新拾遺
をも撰はれしうはいかにもうやうたなれ

侍して可見かは家内のともかくもかゝはせたまは
せさせられしにそ八んめてたくましくは

一 昔後京極殿まゝく八代集を人々に定家卿
六首をえらくの時くの歌撰ら進らせはさき
けれは又は光源氏乃わたくしを人々関に見させら
れはらくこの遣の様を出かしてよしありの他
きこえし見らもこ物をこ内てに見せけれ
らんすゝめのすゝ家及は見て河佛乃禅定
御説はらく西本とゝかりの老覚の出来るて
入くはかりもゝや給の事もつ孫に申させ
度存じ候

一 家隆卿乃歌に
あらし吹峯の山もひろうしも
後のさはらり雪ちらふらん
此歌乃心をわきまへく人々にて弱はしけれ
分明ならすとも又すすは此阿弥文通すに度
度とひくにしられ申すかくはさ内ゝは和歌
の秘ることもあらすはへてしん給はすとは尤しは
へきすよくもとも心え者はかるまや絶よ申給さ
給はさく定家卿の作は紅雲過雪の術とも申済
乃はなりは更詞おこく数給へき事なくすはこ
川らさとりし給へつき朝みはへしこりや露

仏法あと教分別傳とゝやのこゝろをんん
おもひつゝのこゝろの詩をしけ姿ゆゑ文者の人も
ゝ所ゆ所ゆ度ゆ所ゆ孫ゆゝ所ゆ所ゆ所ゆ
つゝゝゝふゝ思ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ所ゆゝゝゝ事可ゆ所ゆ
ひるゝもいゝゝゝ毛露ゝ
ゝ所ゆ方ゝゝふ和歌乃御ゝを

應永拾年正月日

以後立判

以草子和歌一帖に毛筆一帖の仮名ゝ仮ゝ合跡畢

右此一帖は自筆本今書写不俊紙数

應永九年壬寅十月日　前上総介　範政立判

今川貞世自筆本云写者や和歌所御本ゝ
有相違歟や早案ゝ

奥書合跡用捨ゝ

享保二年八月日写之

此本拙稿若干脱漏誤字有之歟
了後自筆本其子孫今川淳氏ノ所方ヨリ
借出ス享保二年癸酉八月廿日下者於　尾列
一覧之再和邪倫不充器拙ニ詳所一覧之
依所印桃井漢別之子孫ヤ而可作化者ヤ

此意七年六月日書写之

成